

# 2014年度自己点検・評価報告書(シート)

## 【目標の進捗状況(達成度)評価・報告】(最終年度)

### 《大学》

担当(記述)部局は、 ☆印の箇所を記入してください。

### I. 評価項目・要素と担当部局

本報告書(シート)の自己点検・評価項目・要素と担当部局は次のとおりである。

対象部局	言語コミュニケーション文化研究科
大項目	6 教育内容・方法・成果 (研究科)
中項目	6.4 成果
小項目	6.4.1 教育目標に沿った成果が上がっているか。
要素	学生の学習成果を測定するための評価指標の開発とその適用 学生の自己評価、卒業後の評価(就職先の評価、卒業生評価)
小項目	6.4.2 学位授与(卒業・修了判定)は適切に行われているか。
要素	学位授与基準、学位授与手続きの適切性 学位審査および修了認定の客観性・厳格性を確保する方策(院)(専門)

### II. 目標の進捗状況(達成度)評価と報告【2014.4.30現在】

#### 《進捗状況(達成度)評価》

本項目において、2009年度～2013年度の中期的な「目標」と「指標」を次のとおり設定し、毎年度進捗状況(達成度)の自己評価を行っている。進捗状況(達成度)評価は、目標の2014年4月30日現在における進捗状況(達成度)の評価(2013年度1年間の活動評価ではなく、2014年4月30日現在で目標がどこまで進んだかの評価)であり、A、B、C、Dの4段階で行ったものである。A、B、C、D評価の基準は目安として次のようなものである。

- A : 目標実現のための計画や方策などを適切に実行し、目標を達成している。もしくはほぼ達成している。
- B : 目標実現のための計画や方策などを概ね適切に実行しているが、まだ目標は達成していない。
- C : 目標実現のための計画や方策などを実行しているが十分ではなく、目標は達成していない。達成にはまだしばらく時間がかかる。
- D : 目標実現のための計画や方策などを実行していない。当然目標は達成していない。

2009年度に設定した「目標」	左記目標の「指標」	進捗状況(達成度)評価				
		2009	2010	2011	2012	2013
1. 博士学位審査過程の客観性と透明性を向上させるため、関係内規(要領)の整備を2011年度までに整備する。	→博士学位関係の内規整備。	B	A	A	A	A
2. 教育成果の定期的検証を行うため、FDワークショップを毎年実施する。	→FDワークショップの開催、参加者数。成果公表。	B	B	A	A	A
3. 進路調査を実施し、それに相応しい教育プログラムの深化を図る。	→進路調査の実施。卒業後の評価。	A	A	A	A	A

☆

  

2010年度以降に設定した「目標」	左記目標の「指標」	2009	2010	2011	2012	2013
	→					
	→					

#### 《進捗状況(達成度)報告》 担当(記述)部局は「指標」に基づいた報告をしてください。

上記で自己評価した目標の進捗状況(達成度)について、次のとおり説明・報告する。

目標1	A	Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 生じた問題や状況に応じて、数年ごとに博士課程に関する内規を整備してきた。また、言語コミュニケーション文化研究科は全般的な内規以外にも、より詳細な博士論文甲号、博士論文乙号(論文博士)に関する申し合わせ事項などを制定している。さらに、博士論文の審査基準を明文化し、2013年度より公表している。	☆
		Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 1名の外部審査委員(副査)含む4名の審査体制を敷き、厳密な論文審査を行ってきた結果、今年度は3名に博士論文(甲号)が授与された。言語コミュニケーション文化研究科後期課程指導教員会で審査過程が逐次報告されることにより、透明性を保ちつつ論文の学術性を担保することが可能となった。	☆
		Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 博士論文審査体制の厳密性を維持し続けることで、今後も社会に対し、より価値ある学術成果を発信していく。また博士号授与の実績やプロセスを受験者向け冊子等で公開し、本研究科への優秀な研究者予備軍の進学を促す。	☆
		その他	☆

<p>目標2</p>	<p>A</p>	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 前年度までFDワークショップを行い、引き続き、本年度はFD研修会を行った。参加者は教員14名、職員2名で、授業や個別指導における学習・研究環境の整備について、活発な意見交換がなされた。このFD研修会の概要と成果は研究科委員会で報告、検討された。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か 研究科内で各教職員が個別に抱える問題が共有されることにより、学習・研究環境の改善点が洗い出された。効果的な議論を導くため、多くの構成員の参加を促すことが必要である。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か ワークショップおよび研修会を、1年に1回のみならず、異なるテーマで複数回開くことにより、多角的な教育成果の検証を行っていく。</p> <p>その他</p>	<p>☆</p> <p>☆</p> <p>☆</p> <p>☆</p>
<p>目標3</p>	<p>A</p>	<p>Do: 目標を達成するために、目標を設定した年度以降、どのようなことを、誰が、どのようにして、どれだけ取り組んできたか 言語コミュニケーション文化研究科では、博士前期課程を修了した学生を対象に、研究科開設以降、課程終了時の3月に(アンケートの1項目として)進路調査を毎年欠かさず実施している。2013年度の調査結果も2014年度4月の研究科委員会で報告されている。</p> <p>Check: 結果はどうであったか。良かった点・効果が上がった点は何か。課題・改善点は何か これまでも修了者の多くがアンケートに協力的であったが、今年度は回収率が95%に達し、進路の実態に関するデータが十分に蓄積され、課程修了後の進路指導にあたって研究科全体での教育方針・指導方針が立てやすくなった。</p> <p>Action: 今後どうするのか。伸長策、改善策は何か 進路データの蓄積を詳細に分析し、言語コミュニケーション文化研究科へ進学する院生の志向を提供科目や論文指導方針に反映させることで、教育プログラムを院生の多彩なニーズに応える内容へと柔軟に変化させていく。</p> <p>その他</p>	<p>☆</p> <p>☆</p> <p>☆</p> <p>☆</p>
<p>備考</p>			<p>☆</p>